

## 学校行事と学校文化 キャリア形成の視点から生徒会活動の意義を考察

2005年度 生徒部

**【抄録】** 生徒会活動は、HR活動、委員会活動、部・サークル活動に分けられる。これらの活動は自治活動であり、共通点がある。それは集団が1つの目標に向かうこと、役割分担ができること、目標をつくりあげるまでに時間がかかること、その結果達成感が得られること、その経験によって自分が集団の一員として受け入れられている認識できることである。生徒会活動が他の教育活動と異なる点は、目標を同年代の仲間によって互いに達成しあい、満たされていくところである。自分たちで 学び合っていくこれらの活動は、大人よりも同年代の仲間を求める、青年期のキャリア形成にはぜひとも必要である。今回は、生徒会活動のなかでも学校祭（光粒祭）生徒会フォーラムを取り上げ、キャリア形成の視点から生徒会活動の意義を考察し、報告する。

**【キーワード】** シャドーカリキュラム 生徒会活動 学校祭 光粒祭 委員会活動 生徒会フォーラム

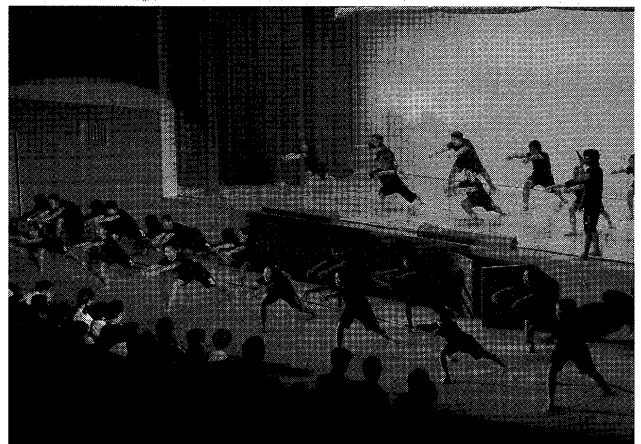
### 1 はじめに

学校には教科活動と教科外活動がある。教科外活動には、指導要領にも明記され、活動が保証されている特別活動と、特別活動を軸にしながらも、生徒の間で自然発生的に行われる活動がある。いずれの活動も、生徒会活動の中の行事や部活動の中で生徒たちに検証され続け、シャドーカリキュラムとして定着し、学校文化として独特の校風をつくっている。本校の生徒会は、中学と高校で独立した別組織である。それぞれの発達段階に応じた生徒自治を確保するためである。しかし、一貫校の利点を生かすために連携は強く、学校祭のテーマや募金活動など、中高合同で行う必要のある活動や、そのための合同生徒議会の準備を中高連絡会で話し合い運営している。部・サークル活動でも、6学年が混ざって活動する部・サークルから、練習場所・部室を共有するだけの部・サークルまで様々であるが、同じ目標に向かっている者同士の仲間意識は強い。ここでは、生徒会主催の行事、学校祭を中心に、学校文化が中高生（プレ青年期及び前期青年期）のキャリア形成に与える影響を考察し報告する。

### 2 学校祭公開の意義

本校は4年前から学校祭を光粒祭（光粒＝交流＋一人一人が光る粒）と名付け、2日のうち1日を一般公開している。公開の目的は、本校の教育活動を広く知ってもらうためと、公開する学校祭を運営することで生徒会活動をより活発にすることである。公開することは当時の執行委員長が呼びかけて決まったことではあるが、公開初年度は生徒にも戸惑いがあった。自分たちの「文化」がどのように評価されるか不安があったようだ。内輪受けで済ませていた学校祭の目標が高くなった。昨今の生徒会活動が行事を請け負うばかりで、自治会活動は低迷しているという声を聞く。本校の生徒会活動についても

学校祭を成功させることに最も力を注いでいるように見える。しかし、公開の前と後では自治会活動にも良い変化が見られる。学校祭の規模が大きくなったことで、企画に関わる人数が多くなった。公開前は中央集権で執行部が企画の立案から実行までを行っていたが、公開後は、執行部の役割が立案や来場者の安全対策やPTAとの折衝に移り、常任委員会が各企画の運営の中心に変わっていった。（表1参照）各委員長たちは学校祭を通して、立案から実行までの方法を学び、委員をまとめるという経験をした。この経験は日常の委員会活動にも良い影響を与えた。委員長だけでなく、委員も学校祭の中で役割分担の重要性を経験し、日頃の委員会活動（当番活動）が円滑に進むようになった。部・サークル活動においても良い効果があった。特にサークル活動についてであるが、サークルは対外試合や発表がないので学校祭が発表の場になる。（表2参照）本校の中だけでなく、多くの人に見てもらおうということは刺激になり来場者アンケートでも良い評価を得て励みにもなっている。1年間の活動の目標にしているサークルもある。このように公開は生徒に良い変化をもたらし、生徒に自信と本校生徒であるという自覚をもたらしてくれた。学校祭で具体的



に行われていることは次に報告する。

表1 05年度光粒祭役割分担(05光粒祭実施要項より)

企画名	担当	企画名	担当
開閉会式	中高生徒会執行部	演劇コンクール	中学文化委員会
分科会	高校生徒会執行部	中学生徒会企画	中学生徒会役員
体育祭	中高体育委員会	中学雨天時企画	中学生徒会役員
制作物	中高生徒会執行部	中学終わりを楽しむ会	中学生徒会役員
作品コンクール	中高図書委員会	学校生活紹介コーナー	教員
輝く授業展	中高総合人間科係	P T Aバザー・模擬店	P T A
高校H R企画	高校文化委員会	警備・ゴミ処理	中高生活委員
部・サークル発表	高校生徒会執行部	受付	高校生徒会執行部・P T A
ステージ企画	高校生徒会執行部	渉外	高校生徒会執行部
模擬店	高校保健委員会	会計	中高生徒会会計

表2 05年度光粒祭部・サークル発表企画(05光粒祭パンフレットより)

部・サークル	出品・発表企画名	内 容
ブラスバンド部	開閉開式	演奏
美術部	作品コンクール	展示：油彩画 日本画 イラスト 木彫
文芸サークル	作品コンクール	展示：競作小説 短歌
科学パソコンサークル	作品コンクール	
家庭科サークル	作品コンクール	展示：ブラウス スカート マフラー
映像演劇サークル	部・サークル企画	制作映画上映
歴史研究サークル	部・サークル企画	展示：終戦60周年記念1日平和資料館
弓道部	部・サークル企画	弓道体験
ダンスサークル	ステージ企画	ダンス発表



### 3 中学演劇コンクール

中学は1学年2クラスという小さな学校なので、コンクール形式をとる場合は学年別ではなく、1年から3年までが互いに競い合う。賞を取るのは3年生が多い。学級単位の優勝は上級生が経験も表現力も勝っている。しかし、下級生でもチャンスはある。1年生には1年生の、2年生は2年生の良さが発揮されたとき、上級生には脅威になる。コンクール形式にしているのはそのためである。それぞれの学級の目標設定もわかりやすい。担当は文化委員である。前期の文化委員は演劇コンクール

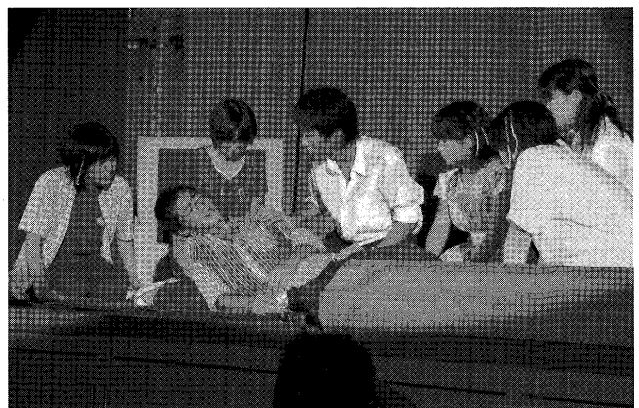
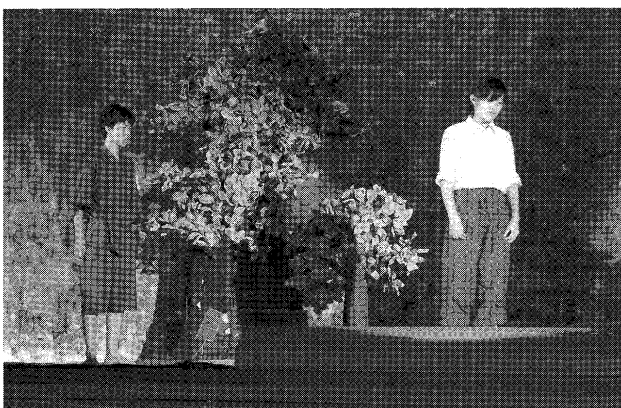
を自分たちの手でつくりたいという意欲のある生徒が立候補する。そして、選出された5月から準備を進めていく。05年度の文化委員長の挨拶を紹介する。

『今年の演劇コンクールを開くためにたくさんの時間をかけて話し合い、昨年の反省を生かして皆さんが楽しめるように、文化委員で協力して考えました。中1にとっては初めての演劇、中2にとっては2度目で少し余裕の見てきた演劇、中3にとってはクラスが団結して作り上げる最後の演劇です。

どの学年も協力し合い、最高の演劇をつくりあげましょう。(05光粒祭パンフレットより)』(表3参照)

表3 05年度光粒祭演劇コンクールの演目とあらすじ (05光粒祭パンフレットより)

	演 目	あ ら す じ
J 1 A	ジグソー	ジグソーパズルの中からケイコの前に現れたのは本物の悪魔だった。願いは何でも叶えよう、と言う。別のジグソーからは別の魔女が。ケイコは大混乱してしまう。
J 1 B	王様は魔法がお好き	ペルシャのある宮廷。その王様は魔法が大好き。でも、本当は魔法なんて使えない…。全てはゾオラの悪巧み。ひょんなことから、国を救うことになったカシムはいいことを思いつき…。
J 2 A	桜井家の掟	ある日、蘭が家に彼氏を連れてくることに。夏実と杏はどんな彼氏だろうと妄想をする。そして、蘭の彼氏がいよいよ桜井家に。しかし、その彼氏はなんと杏の…。一方、ただ一人真希はすねていた。その真相とは…。
J 2 B	心の向こうに	関西から転校してきて何か合わない哲央。優柔不断の優。父のリストラ、親の不和に心を悩ませる美琴。そして彼らを取り巻く級友や教師。文化祭を前にしてガマンしてきた想いが吹き出してしまふ。心の向こうに見え隠れする私たちの日常を描いた感動物語。
J 3 A	夏休み	昭和11年の暑い夏。6人の子どもたちは小学校最後の夏休みを迎える。子どもたちがかくれんぼの途中、お化けに出会う。そのお化けは9年後の戦争で命を失い、戻ってきた人たちだった。その中、大場が出会ったものとは…。戦争が奪うものとは。戦争なんてもうしなくていい。
J 3 B	Angel Tear	人形師のシオンは、人形たちと少年エリオットと暮らしている。ある日新しく完成した人形のアリスを受け取りに来た、昔の戦友ゼロと再会し、皆で楽しい日々を過ごす。それは長くは続かなかった…。



### 4 高校HR企画

高校も1学年3クラスという小さな学校なので、学校

祭の取り組みは全学級参加のHR企画が中心となり、舞台企画や模擬店などは有志で構成されている。従って部活で部サークル企画に参加し、かつ委員会で案内や警備

を担当しする生徒は、1人3役をこなさなければならず、大忙しである。こういう生徒は結構たくさんいる。しかし、どの生徒もいきいきと取り組み、むしろ忙しさを楽しんでいるようにも見える。HR企画とは文字通り教室で、学校祭のテーマにちなんだ展示やパフォーマンス、ゲームが行われる。05年度のテーマは「輝跡」であった。小規模校ながら、数多くの企画を展開できるのは、HR企画をベースにしなが、有志形式で他企画の参加者を募り、成立しているためである。これは、学校祭が盛り上がるだけでなく、生徒に多くの活躍の機会を与え、個々に目標をたて、達成までのプロセスを経験しやすくなっている。何よりも、生徒自身が「自分はここに居ていいんだ」という、居場所を与えて、自己肯定感を高めるのに役立っている。中学の演劇では、役者、大道具、など1つの演劇に対する役割分担だったが、高校では学校祭全体の役割分担が生徒たちで行われ、使用教室や時間の割り振りという、おおきなマネジメントを手

がけている。05年度の高校執行委員長の挨拶を紹介する。

『いよいよ、待ちに待った05年度光粒祭の開幕です！。皆さんはどんな思いでこの日を迎えていますか。私は、友達や先生、先輩や後輩、このメンバー全員で今年の光粒祭を迎えられたことが、何よりも嬉しいです。このメンバーだったからこそ、できあがった光粒祭です。全員に、「お疲れさま」の一言と同時に、「ありがとう」と心から伝えたいです。今年の光粒祭が一生忘れられない『輝いた跡』として皆さんの心に残れば幸いです。各クラスのHR企画や有志発表、輝く授業展や部サークル発表、それぞれの企画はどれも「参観者に自分たちのメッセージを伝えたい」という思い出一生懸命つくられた、汗と涙の結晶です。ここで築き上げた「絆」という名の宝物を、これからもずっとずっと大切にしていって下さい。(05光粒祭パンフレットより)』(表4参照)

表4 05年度光粒祭HR企画のタイトルとコンセプト (05光粒祭実施要項より)

	タイトル	コンセプト
S1A	洗車男	あなたの洗車がキセキにつながる。
S1B	あっ！1B博	愛地球博のことをいろいろ体験してもらって、教室だけど愛地球博の会場にいるきせきを味わってもらおう。
S1C	THE GREAT EMPEROR	輝跡というテーマに合わせて、我々が歩んできた歴史に目を向け、現在との文化的相違を遊びながら体験し、歴史の趣をはかる。
S2A	輝ッCHU	私たちの成長の「軌跡」の影にはポケモンがあります。そこで、みんなにポケモンを用いました。最初に相棒のポケモンに出会い、ロケット団に立ち向かい、「奇跡」を起こしてもらいます。
S2B	STUDY WARS —イツの復習?—	みんなの好きなスターウォーズを取り入れたゲームをしてもらい、その得点によってSTUDYする問題のレベルが変わる。
S2C	ホースとバスターズ	ゴーストバスターズの世界をホースや掃除機を使ったゲームで体験し、お化け退治で奇跡を起こす。
S3A	A-DASH☆	マリオの「軌跡」を追い、マリオとその仲間たちに出会えた「奇跡」を体感してもらおう。
S3B	ドラゴンボールG (ギネス)	テーマ「軌跡」にちなんでギネスのようなゲームに挑戦し、「奇跡」を起こす。
S3C	HOUNTED HOUSE ～奇跡の生還～	「軌跡」→「奇跡」と考えて、お化け屋敷という危機を乗り越えて、奇跡的に生還してもらおう。

## 5 おわりに

ここまでの報告でわかるように、生徒会活動は自治活動であり、共通点がある。それは集団(学校、学級、委員会、部活動)が1つの目標に向かうこと。そのために役割分担ができること。そして目標をつくりあげるまでに時間がかかること。その結果達成感が得られること。

その経験によって自分が集団の一員として受け入れられている認識できることである。特に行事は学級・学校を1つにまとめ、目標が具体的で見つけやすい。その上、目標達成までの過程を学びやすい。たとえば、演劇を例にあげると、感動を与えるような劇をつくろう、という目標を立てるとする。とりまとめをする生徒を選び、脚本を決め劇を発表する日までの計画を立てる。役者、大

道具、衣装、照明など役割分担をする。役割ごとに必要なものを調達し準備を進め、それらをまとめて1つの劇を作り出していく。こういう活動を通して、生徒は適材適所を知り、自分の集団での位置や居場所を見つけ、達成感を体験する。目標達成のために必要な資源を使うことを学ぶ、これはまさしくキャリア形成に必要な経験である。生徒会のある役員が、「行事の準備をしていると、楽しい、嬉しい、疲れる、と言う感情の他に、必ず、むかつく、という気持ちを味わう。でも、終わった時の達成感は何にもものにも代え難いすばらしいものだ。」と語っていた。達成感を得るという経験は、自己実現の欲求を満たしてくれる。この経験の繰り返しは青年期の若者に肯定的な自己概念を持たせ、自分自身の行動とその結果について責任を持たせる。

生徒会活動が他の教育活動と異なる点は、目標を同年代の仲間によって互いに達成しあい、満たされていくところである。自分たちで 学び合っていくこれらの活動は、大人よりも同年代の仲間を求める、青年期のキャリア形成にはぜひとも必要である。

(文責 原 順子)

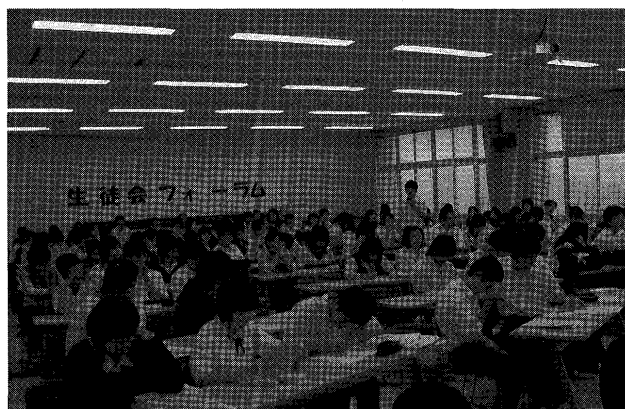


## 6 生徒会フォーラム

### 1) 発足の経緯

愛知県内の高等学校生徒会交流の場として、市立高等学校や私立高等学校には古くから見られた生徒会組織としての横の繋がり組織が県立高等学校には公には存在していなく、県立高等学校生徒会がお互いに公の場で意見交換をすることができなかった。

そこで、附属学校内に設置された教育学部が運営母体となっている中等教育センターを組織の中核に置き、国立・県立・市立・私立とあらゆる設置形態の高等学校間で問題点を共有し、議論を深め、アイデアを出しあう「生徒会フォーラム」の案が浮上した。



### 2) 参加校、参加人数の推移

年度	発表校	参加校 (発表校除く)	参加高校生数 (発表校含む)	参加中学生数	参加生徒合計
03年度	7校	11校	81名	12名	98名
04年度	6校	12校	83名	4名	87名
05年度	6校	12校	94名	13名	107名

### 3) 活動内容

「生徒会フォーラム」は第Ⅰ部(午前全体会)・第Ⅱ部(午後分科会)の2部構成で行っている。第Ⅰ部では発表校生徒会(5~6校)からの活動報告と質疑応答、第Ⅱ部では予め決まったテーマに沿って参加間で議論を深める形式で行っている。

例年、第Ⅰ部全体会では5~6校の生徒会執行部から年間の活動方針や活動実績を報告し質疑応答を行う生徒会執行部組織形態や学校祭を中心とした発表が行われ、活発な意見交換が行われる。第Ⅱ部では本校執行部生徒が司会進行・記録を担当し各学校生徒会が日頃抱えている問題や悩み事を他校と共有し問題解決を行っている。

### 4) 分科会テーマ

- 2003年 第1分科会・学校祭  
第2分科会・制服  
第3分科会・諸活動  
非公開分科会・3校部会(東京大学教育学部附属中等教育学校・奈良女子大学附属中等教育学校・名古屋大学教育学部附属中・高等学校)
- 2004年 第1分科会・学校祭  
第2分科会・制服  
第3分科会・諸活動
- 2005年 第1分科会・学校祭各企画の立案  
第2分科会・学校祭各企画の実施詳細  
第3分科会・生徒会の意義

### 5) 3校部会

生徒会フォーラム1年目の2003年は東京東京大学教育学部附属中等教育学校・奈良女子大学附属中等教育学校を本校に招待し、今後本校を含めた3校間の生徒会交流のあり方について議論した。自己紹介にはじまり、同じ国立附属としての3校の校風・規律の違いを話し合った。今後の交流の仕方や生徒会執行部としてのあり方が話題の中心となり、有意義な意見交換の場となった。

### 6) 参加生徒からの意見

(中学生)

- ・とてもわかりやすく、聞きやすかった。中学ではないことばかりで、来年高校に入学してからのことがとても楽しみです。生徒会活動も活発で話し合いもとてもよかったです。中学でもこのような会を取り入れたらいいと思いました。
- ・今まで生徒会というものにあまり興味があり
- ・ませんでした。が、高校生活にも高校の生徒会にも興味を持つことができました。

(高校生)

- ・とても勉強になり、ぜひ私たちの高校でも取り入れようと思った事や、検討してみようと思った事は多かった。自分たちと違う考えや、行事だけでなく、生活全体に関わるものやっている学校ややろうとしている学校があり、その意欲に感激した。
- ・それぞれの学校のやり方、方針などいろいろ学べることもあったし、ためになり良かったと思う。これからこういう機会にぜひ参加して、意見交換などをし、それぞれの学校が楽しくなるようにしたい。
- ・今回、始めて参加して、自分たちの学校と同じ活動のところ、また、足りないところがわかり、とてもよかったです。参考にさせていただきます。また参加したいと思います。

### 7) 名古屋大学との連携

毎年生徒会フォーラムは6月の第1土曜日に実施している。これは名大祭本部実行委員会が主催する名大祭の日程と同じである。これは本校が名古屋大学のキャンパス内に立地しているため、本校生徒会執行部が大学の名大祭本部執行部の学生を協議した結果である。名古屋大学にとっては、多くの高校生が名大祭に参加し、また本校にとっては昼食時の名大祭に参加してもらうことにより大学の大学祭から多くの事を学ぶことができるといった双方向にメリットをもった連携である。

### 8) おわりに

今年で3年目を迎えた生徒会フォーラムであるが、年を重ねるごとに、内容が充実してきた。1年目は他校生徒会との議論もぎこちなさが伴っていたが、3年目の今

年は、毎年参加している常連校生徒会執行部や新規参加の生徒会執行部の生徒も増え、活動に深みと内容の充実が加わった。

また生徒会執行部生徒だけでなく、生徒引率の顧問教員も、これまでは生徒会活動指導が、手探り状態であったのがこのフォーラムで生徒が活発に活動している様子をみて今後の生徒会指導の方針が見えてきたという感想を述べた教員もいた。4年目に当たる来年は、参加高校や参加中学生の拡大、さらには中等教育センターとの更なる連携を目指し、名古屋市内・近郊の各高校生徒会が学校という壁を越えた交流ができるといいと考えている。ファシリテータとしての教員のもと、生徒主体で考え動く生徒会活動を今後とも期待するだけでなく、この活動がその役割を大きく担っていると考える。

(文責 三小田 博昭)

